

猿長者

神谷カマド (1902・M35) 字瀬名波 (03 : 44)

あぬ^{うんかし} 昔^{とし}、年寄^{みーとらんだ}い夫^{とくる} 婦^あ めんしえーん^あ 所^あ ぬ^あ 在^あ
たん。あんしな一、貧^{くし} 乏^{むん} 者^か なんそ一ち、な一食^か み
物^{むぬ} 人^{いき} 少^い らはぬうりやみしえーた^ば んでい。うぬ場^ば にあ
ぬ、「な一、今日^{ちゆー} やな一火^{ひーそーがち} 正月^{ひーそーがち} さ一や一、ウスメ
一」でいち、ただあんしめんしえーるば一に。
ある人^{ちゆ} ぬ、一^{いちばの} 番^{とうない} お 隣^{いえーき} ぬ金^{ちゆ} 持^や 人^や ぬ家^や からめ
んそ一ちや一に、「私^{わん} ね一、今日^{ちゆー}、一^{ちゆゆる} 夜^{とう} お^{とう} な一泊^{とう}
ま^い らさんな一」でい^い 言^い み^い そ一ちや^い ぐ^い とう。うぬ金^い 持^い
人^{ちゆ} ぬ家^や や、「物^{むぬく} 乞^{なま} や一今^{とう} から泊^{とう} ま^{とう} ら^{とう} す^{とう} んでい^{とう}
ち^い 人^い ぬ家^か や、「如^い 何^か なし^い 泊^い ま^い ら^い さん」でい^い ち、な一^い 其^い 処^い
か^い ら一^い 遣^い ら^い さ^い っ^い て一^い み^い し^い え^い ー^い る^い ふ^い ー^い じ^い ー^い て。
あん^い さ^い ぐ^い とう、また^い う^い ぬ^い 火^い 正^い 月^い ぬ^い お^い 婆^い さん^い 達^い
か^い い、うぬ^い 人^い ぬ、^い 「と^い 一^い っ^い た^い 一、い^い や
一^い や^い あ^い ん^い し^い え^い ー^い 鍋^い ひ^い き^い れ^い ー」^い でい^い ち、水^い 入^い っ^い てい^い
鍋^い ひ^い きた^い ぐ^い とう。あん^い さ^い ーに^い う^い ぬ^い 人^い ぬ^い 米^い ぐ^い わ^い ー少^い
い^い る^い 入^い り^い み^い し^い え^い ー^い ぬ^い ぐ^い と^い ーし^い が^い や、う^い ぬ^い お^い 婆^い さん^い が
に^い 煮^い み^い そ^い ー^い ち^い や^い ぐ^い とう、な^い 一、^い な^い 一^い 鍋^い ぬ^い い^い っ^い ぱ^い い^い な
て^い い^い よ。あん^い さ^い ーに^い、う^い り^い さ^い ーに^い 年^い え^い 取^い み^い そ^い ー^い ち
や^い んでい^い、う^い ぬ^い お^い 婆^い さん^い 達^い や。
あん^い し^い さ^い ぐ^い とう、また^い 翌^い 日^い あ、^い 「と^い 一^い 若^い 水^い り^い ち
て^い、水^い 汲^い り^い っ^い 来^い っ^い う^い り^い し^い ー」^い でい^い ち、う^い ぬ^い 人^い ぬ、あ
ぬ^い だ^い 一^い 言^い み^い そ^い ー^い ち^い や^い ー^い に。う^い ぬ^い 若^い 水^い え^い 汲^い り^い っ^い 来^い っ^い 熱^い
ら^い ち、翌^い 日^い 浴^い み^い そ^い ー^い ち^い や^い ぐ^い とう^い や、な^い 一^い お^い 婆^い さん^い 達^い
あ^い い^い っ^い ぱ^い ー^い 若^い くな^い てい^い め^い ん^い し^い え^い ー^い ん^い でい^い よ、
夫^い 婦^い 。

【共通語訳】

昔、あるところに老夫婦が住んでいた。それは貧乏で、食べ物もろくに無かったそうだ。食べ物も無いので、「もう今日は、火に暖まって年越しをしようね、じいさん」と、大晦日の晩を過ごしていたようだ。

隣の金持ちの家では、ある人が訪ねてきて、「私を今夜一晩泊めてくれないか」と言った。「こんな時に乞食を泊めることができるか、絶対泊めることはできない」と、その人は金持ちの家から追い払われてしまった。

それで今度は、その貧乏な老夫婦の家へやって来た。「私を泊めてくれ」と言うと、「そうですか、うちは食べ物も何もなくて、こうして火にあたっただけ年越しをしているのですが」と答えると、「それでもいいから、泊めてくれ」と、その人は泊められたようだね。

そしたら、その人に、「さあ、鍋を火にかけなさい」と言われたので、鍋に水を入れて火にかけた。その鍋にその人が米を少し入れるようだったが、鍋にはいっぱい御馳走が炊き上がってね。そうして、おばあさんたちは、その御馳走で年越しをしたそうだ。

そして、翌日には、「さあ、年の初めの水を汲んで来なさい」と言われた。それで、水を汲んで来て沸かして浴びたところ、夫婦二人ともとても若くなった。

わか
若くなていめんしえーたぐとう、また 隣 ぬん、
いえーき ちゆ ぬーし ちゃー ち うんじゆ
金持ん人ぬ 主 ン 達 ン ुरい聞ちゃーに、「貴方な
ぬー
一何んち、あんし若くなていめんしえーが」んち、
「あんあんし、さぐとう、な一私達あ若くなとーん
でー」んでい言みそーちゃぐとう。「あんしえー、
うぬ人お何処んかい行みしえーたが」でいち。

あんさーに、またわざわざうぬ人頼りめんそー
ちゃー ちゆ たぬ
来 に。また、元 ぬ 準備 しみしえーんて、若水
えな一うりさーにさぐとう。うぬ人 達 やうぬ水
あ ちゆ ちゃー みじ
し浴みたぐとう、な一全員、生物んかいなていよ。
あ いちむし
其処ぬ 主 女 お 猿 なたいめーたんでい。また、
うんま ぬーしあなぐ さーるー
鳥んかいなていしん居い。若水さぐとう全員、な一
めーめー いちむし わつ をう
銘々な一生物んかいなてい分くいてい居らん。

あんさーにかい、あんし「うぬ家から、此処んか
うち
い移り」んち、うぬ人ぬ。な一御神やみしえーてー
いえーき ちゆ やー ばあ
るばーて。うぬ金持ん人ぬ家んかいうぬお婆さん
たーたい うち
達二人ぐ一移みそーらちゃぐとう、な一毎日 猿
がきじーが来よ。

あんし、うぬまた人お、御神えまた巡ていめんそ
ちゆ うかみ みぐ
ーち、「ちゃーやが」んでいちゃぐとう。「な一、
さーるー めーなち ちえー じゃま
あぬ 猿 が毎日うりっし来 ういし邪魔っしないび
らんさー」んちやぐとう、「兎一あんやんなー」で
いやーに、「あんさーあぬだ一山から、あぬ黒石取
ちやー ひー や
っ来 にや一火んかい焼ちちきてい、うりがちゃー
あー とっくる う い
座ん 所 ンかい置ちよーけー」んでい言みそーちゃ
ぐとう。

あんさーに、あぬ一、うぬ人おまた黒石焼ち、
ちゆー じぶん うんま う
来 る時分ね一其処んかい置ちえーたぐとう。うり
ちびか あ さーるー ちび あかー
んかい尻掛きてい座ちゃぐとう、猿 ぬ尻え 赤 な
とーんでいぬ 話 。うりんうっさ。

二人が若くなったということ、隣の金持ちが聞
きつけて、「あなたたちはどうして、そんなに若く
なったのか」と聞いた。「このようなことがあつ
て、私たちは若くなったんだよ」と訳を話すと、
「それで、その人はどこへ行かれたのか」と聞いて、
その人を追って頼みこんだ。

それで、その人はわざわざやってきて、貧乏な夫
婦にしたように水を準備させた。そうして金持ちの
家の人達が浴びたら、もう皆、動物になってしまつ
た。女主人は猿になったんだって。また鳥になつて
しまった者いろいろな動物になつて、金持ちの家
の人は皆、散り散りになつたという。

その人は、きっと神様だったんでしょね。貧乏
な夫婦に、「誰もいなくなった金持ちの家に移りな
さい」と言つて、金持ちが住んでいた家に、二人を
住まわせた。そしたらもう、毎日猿が荒らしにやつ
て来てね。

しばらくして、そこにまた、その人、神様がまわ
つて来られ、「どう過ごしているかね」と聞いた。
そこで、「毎日、あの猿がやって来て、邪魔をして
困っています」と言つと、「ああそうか、それなら
ば山から黒石を取つて来て、その石を火で焼きつ
けて、その猿がいつも座る所に置くとよい」と言われ
た。

それで、夫婦は、黒石を焼きつけて、猿が来る時
分にそこへ置いた。さっそく猿が現われ、その黒石
に座り、尻を焼いた。それで猿の尻は赤くなつた
という話だよ。これでおしまい。